

事務所便り 第127号

～人を成長させる人～

小学生の頃、進級して担任の先生が変わったとたんに、ぐんぐん成績の伸びた子や、月並みな営業マンであった人物が転職を機に、トップセールスマンへと成長し、「え、あいつが？」みたいな事例は、実際に存在する。そして、いうまでもなく、その傍らには、人を成長させる人が存在しているのである。

経営者の役割の中で、取り分け中小零細企業において、人を成長させるということは、大きなウェイトを占めるものである。もし、規模の拡大を目指すなら、あるいは自分が病気で働けなくなってしまったとき、事業の存続を考えるなら、自分に代わって活躍してくれる人材を育てることは、必要条件であるといえるだろう。経営者にとって、何か新しい商売を考えることと同じくらい重要である。

そこで、人を成長させる人とは、どのような人物なのか、その真相に迫ろうと思う。まずは特徴として、次の二つを挙げたい。

一つ目は、確固とした「自分」を持っているということである。それは、他者からの評価や、阻害されるかもしれないというような恐怖心を行動の判断基準にしないということだ。換言すれば、自分を他者と区別する心理的な「境界線」（『境界線』ヘンリー・クラウド他著）が明確であり、自分と他人は全く別の人間であるという、疑いようのない事実が自然に身につについて、決して他人に依存したり、逆に支配しようとしたりはしない。

一般に、人は、このような人物に惹かれるものだ。我々が何かの意思決定や行動を行う際、意識するとしないとにかかわりなく、専ら他者の存在、属する集団内における自分の位置付け、あるいは社会的に期待されるポライトな対応、すなわち他者や社会との関係性からの影響を少なからず受けるものである。自ら決めた行動であると認識していたとしても、何か見えない力によって、そのように判断させられ、行動させられているのかもしれない。我々は、そのような日常を生きているのである。そんな中、自分らしく生きることができ、それを貫くことができる人物に憧れを感じることは、（相性はさておき）自然なことなのである。

もう一つは、他人の成長に対し興味がある、あるいは、さりげなく他者の成長を願っているということだ。このことは、面倒見が良いとか、お節介であることとは全く異なるものである。私固有の基準でいえば、「人に優しい人」で、「人の成長を心から喜んであげられる」ということである。

これら二つの要素を兼ね備えた人物に巡り合えたとき、人は成長する。しかも、誰から強要されることなく自主的に、かつ自然に。

元製薬会社の研究員で、嘗て当社に出向していた彼の言葉を借りれば、人を成長させる人とは、薬のような存在なのかもしれない。

「薬が効くのは、人間に生まれながらに備わる回復機能を助け促進するからである」

